海外に輸出された磁器　～金錆焼～

Ⅰ．須恵焼とは

須恵焼は、須恵町大字上須恵の皿山地区において、江戸時代から明治期にかけて焼かれた磁器です。数多くの名品が焼かれ、そのうち 8 点は、町指定有形文化財（工芸）に指定されています。

本窯・新窯・試験窯の 3 基の窯が現存しており、昭和 55 年に県史跡に指定されています。特に本窯は、県内最大規模を誇ります。また、平成 18 年から 21 年にかけて窯跡周辺の発掘調査を実施し、磁器生産に関連性のある建物跡や土坑が見つかっています。

県史跡　福岡藩磁器御用窯跡　本窯跡

Ⅱ．藩の磁器御用窯となる

須恵焼の誕生は、ある一人の武士の“想い”が大いに関係します。須恵焼の創始者は、福岡藩の寺社奉行に所属する新藤安平（しんどうやすへい）という武士です。

染付藤巴文酒注

新藤は、藩の鉱山関係の仕事に従事した時、須恵で焼物に適した土を発見し、この土で作った焼物が藩の名産品となれば、今までお世話になった殿さまに恩返しができると考えました。宝暦 14（1764）年、藩に願い出て上須恵の用地の使用許可を得、個人資金で操業を開始しましたが、経営に苦しみ、先祖伝来の道具や家屋敷まで売り払いました。天明 4（1784）年、新藤安平の死後、その息子新藤長平尚央が初代皿山奉行に就任し、須恵皿山役所が設置され、正式に藩窯となりました。しかし、再び経営が悪化し、わずか 25 年で皿山役所は廃止され、地元の陶工による業が続きました。

幕末の 11 代藩主黒田長溥（ながひろ）の代に、須恵焼は藩の殖産興業の一環として取り入れられ、京都から陶工沢田舜山（さわだしゅんざん）を招くなど技術の粋を尽くした製品が焼かれました。

染付祥瑞丸文蜜柑形共蓋水指

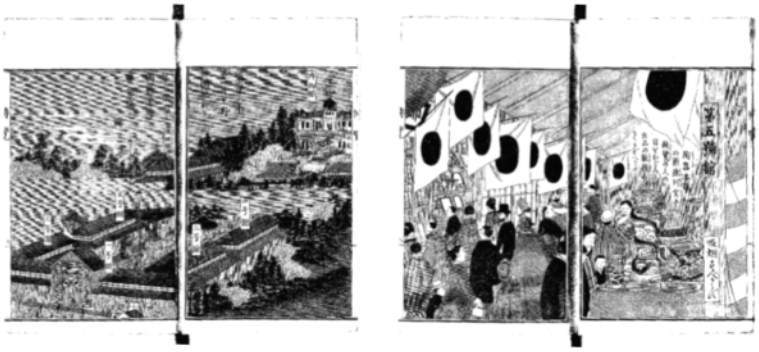
個人の創業から始まった須恵焼は、藩の御用窯へと発展しました。藩の施設で使用され、贈答品としても将軍家や諸大名に贈られました。

Ⅲ．金錆焼の誕生、第３回内国勧業博覧会に出品

明治に入ると窯は民間に払下げとなり、民窯として操業が続きましたが、すぐに経営が破綻しました。明治 19（1886）年に粕屋郡長の主導により、のちに初代須恵村長となる田原精一や、江戸時代日本四大眼科の一つに数えられた田原眼科の田原養全（たはらようせん）、博多の商人玉ノ井（たまのい）騰一郎（とういちろう）をはじめとする福岡･博多の商人が出資して須恵陶器会社が立ち上がり、株式組織としての経営体制が敷かれました。ここで焼かれたのが金錆焼です。普通、磁器は呉須（ごす）で絵付けを施したのち、透明の釉薬をかけるため、白地に絵付け部分がコバルト色に発色しますが、金錆焼は表面が黄金色に光り、絵付けの部分は深い緑色をなします。

須恵町指定文化財
金錆染付山水文花生
（明治 22 年制作）

金錆焼は、明治 23（1890）年に東京上野で開かれた第三回内国勧業博覧会に出品されました。当時の新聞『日本』の記事によると、「一種の美、光沢あり」「品格有て賤しからず」と評され、当時の人々から高い評価を得ていたことが分かります。



『廿三年博覧会実況』長谷川園吉 1890
（国立国会図書館インターネットサイト
「博覧会　近代技術の展示場」より）

Ⅳ．世界に輸出された須恵焼

明治 20 年に福岡で創刊された西日本新聞の前身である『福陵新報（ふくりょうしんぽう）』の明治 21 年の記事によると、須恵陶器会社で製造した須恵焼は、博多の商人、玉ノ井騰一郎が販売を一手に引き受けていたようです。当初、中国向けに製造、輸出していましたが、その後、神戸在住のイギリス人モリソンと販売の契約を交し、神戸の商館を通じて海外に輸出されました。明治 23 年の第三回内国勧業博覧会において好評を博し、翌年の『福陵新報』では、横浜、神戸の外国の商館と契約し、海外へと輸出された様子が記されています。

お殿様の恩返しとして地元に名産品を作りたいという新藤安平の願いは様々な職人によって引き継がれ、明治期にはアジア、さらには世界へと輸出されました。現在も創始者の“想い”を受け継ぐ優れた名品は、須恵町立美術センター久我記念館で展示しています。上須恵で焼かれた珈琲セットや洋食器が、海を渡り、遠くヨーロッパのどこかの古城で今なお残っているかもしれません。

金錆染付珈琲一揃